2008年度
非文字資料研究センター　**第１回公開研究会**

非文字資料としての ポスターの保存と活用

日　時：2008年10月25日（土）13：00～18：00
会　場：みなとみらい　KUポートスクエア
報告者：田島奈都子（姫路市立美術館学芸員）
廣田元（髙島屋史料館学芸員）
奥野進（函館市中央図書館奉仕・歴史係）
貴志俊彦（非文字資料研究センター研究員）
司　会：大里浩秋（非文字資料研究センター研究員）

報告1　総論：ポスター研究の現状と課題

田島奈都子（姫路市立美術館）

近年、戦前期に制作された日本製ポスターについては各方面で関心が高まりつつあり、これまで複製芸術に対して消極的であった美術館でさえ、ポスターを「作品」として収集、保存、展示する傾向が見られるようになってきている。しかし、実際のポスターに対する調査研究が進んでいるかといえば、必ずしもそうではない。

たとえば、公的機関で収集対象となる作品は、国内ものよりも海外ものが優先され、前者の場合も、作者や制作年が特定できるものや、現存する企業のものに偏っている。また、ポスターに関しては所蔵していることを公にしている機関が少なく、所蔵していても館蔵品目録を編集、公開していない機関が圧倒的に多い。このため、ポスターに関しては国内における作品の収集、保存の実態さえ十分に把握できておらず、目録の採り方も標準化されていない。この背景には、ポスター自体の歴史が浅いわが国では、それが研究されるべき対象として長らく認知されてこなかったこと、そしてその結果として、ポスターについて体系的に学べる専門教育機関が存在しないことが大きな影を落としているといえる。

今後のポスター研究においては、基礎となるポスターの所蔵および制作実態（現存していない作品を含む）の全容把握を、当時刊行されていた新聞・雑誌、写真資料等にも情報を求めながら、努める必要があるであろう。それと同時に、各機関で見解の異なるポスターに関する

作者や制作年といった基礎的情報の突き合わせ作業を進めていくこと、そしてその情報を広く共有化することが急務であり、関係各機関にはその実現に尽力してもらいたいと思う。

なお、ポスターが「広告」「美術」「メディア」「印刷」など、多様な要素によって成り立っていることを考慮するならば、学際的に研究すべき対象であることは明らかである。また、個人レベルでの作品収集や調査・研究が進んでいる、絵はがき、マッチラベル、写真、ブロマイド、新聞・雑誌広告などの研究・調査動向とも関連づけていく必要があろう。

現在は、インターネットやデジタル技術が発達し、一昔前に比べてカラー画像を伴う情報の蓄積や共有化が簡便におこなえるようになってきており、ポスターについてはより多くの人が関心を持ち、また歴史資料としての活用が図れるようなシステムの構築とその登場が待ち望まれる。ただし、運用に当たっては現状でもさまざまな課題が見えており、利用する側のモラルも含めて検討すべき点は少なくない。

図1

図2

図3

図１　高岡商業学校で開催された「広告資料展覧会」の会場風景（『実業界』第６巻第６号、1914 年）
図２　花木酒造のポスター。同社の商標である富久娘にちなんだ岡目の図柄。
図３　車窓越しに見えるのは当時の大日本麦酒株式会社の恵比寿工場（現在の恵比寿ガーデンプレイス）。近代的な工場は地域のランドマーク的な役割を担っていた。（1912〜15 年）

報告2　企業史料館としての立場から：所蔵ポスターの保存・修復・公開

廣田　元（髙島屋史料館）

髙島屋史料館にあるポスターは、これまで他の美術品とは違いあまり丁寧な扱いをされていなかった。じつは、3 年前に姫路市立美術館からポスター貸出の申し入れがあり、該当のポスターを点検したところ、作品の汚破損を指摘され、展示と長期の保管に耐えられる補修の必要性から、専門家の助言を入れて徐々に改善していくこととなった。

保存については専用棚の購入や専用ポリエステルファイルと中性紙による保護を一部実施し、補修については長期の展示に耐えうるように、人気のあるポスターから順に次のような補修をおこなった。

1. ポスター表裏面のドライクリーニングや洗浄によって汚れや作品の劣化に関わる汚損物を取り除き、シミの原因である背面のテープや接着剤、ラベルを除去した。
2. 破断面を接合し、欠損部分に和紙を補い、審美的なバランスを強化したのち和紙で裏打ちをする、状況により破損、剝落箇所にセルロースの粉末を注入し接着剤で固定して、着色、補彩することによってポスターの特徴を生かせるよう「化粧直し」をおこなった。

姫路市立美術館への貸出し以降、美術館や印刷博物館と関係ができ、ポスターだけでなく、チラシ、カタログなどの情報や史料館が所蔵している以外の作品の情報が得られるようになった。また、行方不明であった作品の所在やデザインが判明した。とくに次の 3 点は顕著な一例である。

1. 関東大震災で全焼した南伝馬町店（東京店）の営業再開ポスター。現物はアド・ミュージアム東京が所蔵しており画像の提供を受けて展示した。
2. 北野恒富の半裸の美人画に与謝野晶子直筆の歌が書かれ、電停に貼るとその夜のうちになくなってしまったという伝説のポスター。このコレクターが判明し、今回借用することができた。
3. このコレクターはまた、「東京日本橋店新築開店」

（昭和８年）のポスターをもとにして作られた絵葉書を所蔵しており、原画と絵葉書をもとにポスターを復元・展示することができた。

企業史料館としては、専門家や関係資料館との連携が必要であり、こうした情報の共有化を通じて、ポスター自体の収集や修復も進めていかなければならないと考えている。

図４　ポスターの補修（補彩）前（左）と後（右）の比較

図５　矢の根五郎　俳優衣裳陳列会
大阪の美人画家北野恒富の作。インパクトのある濃厚な配色は当時議論を起こした。「矢の根五郎」は市川家の十八番で市川左団次の屋号は「髙島屋」だった。（1919 年）

図６　科学日本の誇 テレビジョン完成発表会
東京日本橋店で日本初めてのテレビの公開実験放送が放映された。（1939 年）
図７　京舞妓 若松
北野恒富の作。髙島屋東京南伝馬町店開店ポスターで「京呉服」をブランドとして強く打ち出した。（1916 年）

報告③　公共図書館としての立場から：所蔵ポスターのデジタル・アーカイブ化の試み

奥野　進（函館市中央図書館）

アイヌ絵「御味方蝦夷之図（イコトイの図）」を模写した１枚のポスターがある。1936 年に市立函館図書館館長岡田健蔵（1883～1944）が館員に命じて作らせたもので、朝鮮龍山図書館勤務の林靖一がかつて函館図書館の発行する印刷物を見て「“美の観念”に貫かれた精神は何とも愉快」（1934 年・岡田宛の書簡）と評した意識の象徴ともいえる作品である。

岡田は「図書館人」の枠を越え、図書の収集だけでなく、博物館・図書館の設置を見据えて、資料を網羅的に収集、北方資料の宝庫と称される「郷土資料」の基礎を築くほか、地域資料の範疇を超える多くの「非文字資料」を残した。自ら地元新聞に寄稿して地域の歴史を紹介したり、展覧会を開催して展示目録を作成したり、最新の目録技術を導入したり、資料保護のために保存容器を導入したりと、残された物・記録からはその多彩な活動をうかがうことができる。なかでも冒頭の評にもあるように、自館で発行する印刷物にも深いこだわりを見せていたようで、非文字資料の蓄積の背景にはこのような意識が影響したと思われる。

ここで紹介したポスター資料もそうして残された資料群の一部で、「図書館」の整理・分類を超える資料群と

図8　函館市中央図書館「デジタル資料館」のトップページ
http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html

図9　館内の展示スペースを利用した資料紹介展。整理状況の向上とともに、講演会・展覧会等を開催し、市民の目を楽しませている。

図10　港まつりアイヌ絵画展覧会のポスター。岡田の命により館員大垣友雄が図案作成を行った。市立函館図書館　函館辻印刷所（1936年）

して、目録もなく公開もすすんでいなかったが、函館市史編さん室（当時）と市立函館博物館が中心となって2002年に資料画像をインターネット上で公開、2006年にはデータベース形式への転換を行った。莫大な未利用資料（多くは非文字資料）の整理・公開にデジタルデータを活用して、①資料の保存・利用の両立、②「非文字資料」の内容公開、③低コストでの目録化、を効率的に行えるシステムの構築が有効と考えたからである。

2003年には、図書館も主体的にデジタル・アーカイブ事業に着手、公立はこだて未来大学の協力により、古写真・絵葉書のデジタル化を開始、ポスターデータベースの成果を吸収するとともに2008年4月には事業成果を公開する総合的デジタル・アーカイブ・サイト「デジタル資料館」を開設した（http://www.lib-hkd.jp/digital/index.html）。これら一連のデジタル・アーカイブ化にあたって、「資料」を持つ所蔵機関として、「知識」を持つ大学等の研究機関との連携を深めて共同研究方式を採用、特殊な技術や機械を使用しない、技術的・経費的に他の市町村レベルにも転用できる実用的デジタル・アーカイブの構築を目指している。

報告4　教育研究機関としての立場から：満洲（国）ポスターの学術利用の事例

貴志俊彦（神奈川大学経営学部）

この10年近く、私たちは満洲国関係の図像資料を求めて、祐生出会いの館（鳥取）、函館市中央図書館（北海道）のほか、日本各地の資料館をめぐり、株式会社コンテンツ（岡山）などと撮影をおこなってきた。そして、それらの画像データをもとに、京都大学地域研究統合情報センターを拠点とするH-GIS研究会で議論し、株式会社ヒューマンオーク（京都）と協同してデータベース・システムをつくり、2006年3月ようやく神奈川大学のサーバーを用いてウェブ上で公開することができた。しかし、私たちが実際にデジタル化できたのは、いまのところポスター176点、伝単167点、合計343点にすぎない。この種の「満洲熱」を確認できる画像資料は、まだまだ日本に眠っている。

日本が満洲にかかわり、画像資料を残し始めたのは、

日露戦争を契機としていた。当時、絵はがきが、現在の新聞に代わるニュースソースであった。そして、戦後、新聞の広告や旅行社のポスターによって「満洲熱」が高まった。その結果、新聞社は満洲や朝鮮を巡回する団体旅行を企画し、各種学校はこれらの地域への修学旅行を積極的に進め、さらに日本や満洲では各種の実業・物産博覧会が開催された。「満洲熱」は、日露戦後にもてはやされた画像メディアや歌謡曲などを通じて日本人の間で急速に浸透していき、1932年の「満洲国」の建国、1937年以降の日中戦争によって、フィーバーどころか、狂乱とでも表現すべき事態にまで達した。

上述したデータベース公開後、著者は①2006年11月に箱根で開催された「日中戦争の国際共同研究」第3回国際会議、②2007年8月韓国・安東大学で開催された満洲学会の年会、③2007年10月カリフォルニア大学バークレー校で開催されたPNC ECAI 2007 Annual Conference and Joint Meetingの一セッション「地域情報学Ⅱ：地域研究に対する空間情報解析システムの応用」において、データベースおよび満洲国のポスター画像資料にもとづいた報告をする機会を得た。こうした研究成果の発表によって、このデータベースは徐々に国際的に周知されることになった。その結果、2007年10月、ニューヨーク州にあるスキドモア・カレッジのアニカ・カルヴァー氏から、このデータベースを同大学の日中関係史の授業に利用しているとのメールが届いた。その後、シカゴや釜山、台北などからも利用確認のメールが届いた。当初考えていたように、このデータベースは教育や研究の素材として国際的な学術貢献に細々ながらも寄与しつつある。

なお、報告については、おもに貴志俊彦「戦争とメディアをめぐる歴史画像デジタル化の試み―満洲国ポスター＆伝単データベース―」（『アジア遊学』第113号、勉誠出版社、2008年8月）をもとにおこなった。

図11

図11　「満洲国とメディア」データベースのトップページ
http://kishi01.kanagawa-u.ac.jp/poster/

図12

図12　満洲国建国1周年を記念するポスター（祐生出会いの館所蔵）
ポスターの下端には、奉天省公署印刷局作成の「慶祝建国周年紀念」第4号とある。満洲国の「五族共和」を象徴する画像だが、ボールを持ち上げるひとりがロシア系の人物になっているところが興味深い。

図13

図13　ミス満洲をモデルとしたポスター（祐生出会いの館所蔵）
満洲国建国を祝う国務院情報処製作のポスター。モデルが着ているのは満洲国の国旗を象徴するもの。実はこのモデルが日本人であることが最近朝日新聞の調査によって判明した。

図14

図14　ドイツ語による満洲国物産絵図（祐生出会いの館）
満洲国の資源や物産、交通や地形をあらわした絵図。ドイツ語ですべて表記されている珍しい一枚。ドイツが満洲国を承認したのは1938年5月。それ以降満洲国の宣伝のために使われたものか。製作者不明。